

もはや教員側も大学側も《しかし……》は許されまい。方向が決っている以上、適確な現状認識に立った方法論を独自に編み、着実にその方向に向って歩むだけである。もし大学における外国語教育が崩壊することがあるとすれば、それは初等、中等教育で外国語修得が完成されている時か、大学そのものが崩壊する時であろう。

## (2) 師弟の悩み——一般英語というもの——

速 川 和 男

公立高校の英語教師で定年前に辞める者が増えている。勉強がきらいなくせに、右へ習えで進学した生徒の生活指導に手を焼いている上に、中学校週3時間制による学力低下への絶望感がその一因となっているらしい。そしてそういう生徒が大学へ進学して、演習的に指導する教養課程の語学教師の悩みの種になっている。中・高で基礎を固めていず、何の因果で英語をやらなくてはならぬかはっきりしない大学生が英語の授業を好むわけがない。また、初歩とはいえ、英語の受験勉強によって植えつけられた外国語への嫌悪感をいわゆる第二外国語にまで及ぼしていないとは限らない。「教養のため」の外国語学習という大義名分は、表て向き無きに等しい。外国語のリズム、美しさ等はさておき、多くの洋書は翻訳され、海外旅行はD級の学生も心臓でこなしてくる。知識という点に絞れば、辞書を引き引き長時間かけて原書を読む学生よりも、同じ時間で何冊もの翻訳を読む学生のほうが勝ることがある。

教師は「できない」という前に、学生の実態を知る必要がある。たとえば語いを例にとってみれば、中学校で学ぶのは900～1,050語（不規則動詞、不規則複数名詞等は別な1語として数える）である。高校は読本・文法・作文が1冊にまとまり、英語Ⅰと英語Ⅱを習う（Ⅰは400～500語、Ⅱは600～700語の新出単語）。これと並行して、英語IIA (Conversation), IIB (Reading), IIC (Composition) の教科書を使用することが望ましいとされるが、そこまで仲々手が届かない。語学においてはせいぜい25人クラスが限界で、それ以上の生徒に recognition から production まで施

そうとしてもむりである。小テストで繰返し **minimum essentials** を叩きこむことの重要性は自明の理である。少人数制が効果的であることは大学においても変りがない。

専門科目でもないのに必修の英語を、しかも高校より一足とびにむずかしい担当教師好みの教科書で学ぶ段になって、一般学生は拒絶反応を持つ。いわんや、選択にした場合、第二外国語（差別呼称だ）にまで手を伸ばす者は少ない。各大学でお好み定食をいろいろ作って食べさせようと努力しているが、学生の食欲は今一つで、仮に食べても仲々咀嚼をしない。こういった現状を打破するには3つの面で改革が必要であると考え。1 つは授業内容である。先に述べたようなプロセスを通ってきた学生に意欲をもたせるために、1. 授業の工夫 2. 教師の資質 3. 教育制度環境を考えてみよう。

各種カルチャー・センターの受講生が熱心で効果を上げているのは、自発的に学習したくて集まっており、少人数制のため親しく **discuss** でき、講師は担任以上にキメの細かい指導ができ、かつ成績発表がないからである。みんなが授業に参加することにより、協力態勢が自然にでき上り、共通の欠点、各自の欠点も納得される。従って、大学が教養の語学を軽視することなく、できるだけ少人数による授業ができるように配慮することが肝要である。大学の教師は程度の差こそあれ、一種のエリートで、苦手意識でこり固まっている一般学生の苦しみや無知にあまり気がつかない。発音記号は習ったはず、勉強の仕方は知っているはず、辞書の引き方は常識・・・と考えるのは、できる学生相手の場合の考え方である。あほらしいかもしれないが、以上のようなことを時に応じて話してやるべきである。

学問は厳しいものとは分ってはいるが、歴史も漫画で学ぶ現況を考慮に入れて、楽しく活力のある授業をする工夫がほしい。レベルがまちまちの学生が雑居していることを思えば、常に半歩下のレベルからスタートし、クラスによっては予習より復習指導で授業を行なってもよいし、レポート、テストの出題の仕方も多様性をもたせるべきである。全員参加のために指名をひんばんに行なうが、教務手帖による脅迫(?)はないにこしたことはない。テープや VTR は有効だが、あくまで人対人が中心になる。学生のミスをせめる代りに、その原因を共に考える態度がムードを柔げてくれる。

近年何を評価するつもりか考えもせずに試験を作ったり、予習もしない教師がいるらしいが、教師は常に“To teach is to learn.”という心掛けで、語学教授以外に学生の信頼をかちとり、たとえしらけていても親しく手を握るのが本当の姿勢であろう。「良くいえば信念の人だが、悪くいえば価値観の狭い硬い人で、感情や情緒に弾力性が乏しい面がある」というのは飛び降り自殺をした小学生の担任についての報告書だが、教養課程の語学教育を活性化する上で求められるのは担当者の flexibility と授業の多様性であると考え。そのために、経営者は待遇面を常に改善し、学歴だけでなく、適材適所といった人間性豊かな専任教師を増やし、非常勤依存率を減らさなければならない。それでもなお、経営と教育のはざまで教養の語学は悩み続けるであろう。以上、紙数の関係で実際に話したことの 10 分の 1 も述べられなかったので、舌足らずで本意が伝わりにくいと思うがお許し願いたい。